

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 69

2013年11月

Special to the Newsletter

創られた観光イメージ —古代文明と開発戦略—

矢持 善和

筆者が天理大学アメリカス学会会長に就任してから1年目の秋を迎えようとしている。この度、これまで多くの先輩先生方が投稿してこられたニューズレターの巻頭言を書くようにとの依頼を受けたので、この秋の年次大会で開催予定のシンポジウム「創られた観光イメージ—古代文明と開発戦略—」についてのコメントを試みたい。

平成25年11月23日、天理大学アメリカス学会は上記のテーマに添って年次大会を開催する。ペルーでの調査・実践の事例をご紹介くださる關雄二氏（国立民族学博物館教授）の基調講演に引き続き、シンポジウム形式でハワイの事例を井上昭洋氏（天理大学准教授）、メキシコの事例を小林貴徳氏（同志社大学非常勤講師）、東南アジアの事例を藤巻正己氏（立命館大学教授）、日本の事例を桑原久男氏（天理大学教授）にそれぞれ報告いただき、議論を展開したいと考えている。本大会のシンポジウムの特色は、「アメリカス」地域を研究対象としない方々にもご参加いただき、「古代文明と観光」という統一テーマに添って開催されるという点である。これまでのアメリカス学会の研究発表の方向性とは異質である。

さて、本学会の初谷讓次氏が書かれた今年度開催予定のシンポジウム趣意書には、「天理大学アメリカス学会は創立以来一貫して『複数形のアメリカ』を主張してきた。…天理大学アメリカス学会が複数形のアメリカにこだわるのは、アメリカを分断する側ではなく、そこに暮らす人びとの視点からアメリカス世界が再構築されることを願うからである。また、『アメリカス』と複数形にくくることによってひとつの『アメリカス』の実現という夢も語っているつもりである」と書かれている。

確かにこれまでアメリカス学会では、一貫してひとつの「アメリカス」という視点から多くの研究成果が発表されてきた。しかし筆者には、それらはあくまでも1492年のコロンブス元年からの西暦に基づいた「アメリカス」であり、ある意味ではヨーロッパ人に発

見され、ヨーロッパ人によって再構築された「アメリカス」ではないかという思いがよぎる。増田義郎著『物語ラテン・アメリカの歴史』によれば、「文明が成立するためには、集約的な農耕が確立して、エネルギーの蓄積と保存が可能にならなければならない。メソアメリカと中央アンデスでは、数千年の試験期間を経て、紀元前 2000 年ごろそのような農耕社会が成立している」と言及されており、さらに、「よく、世界 4 大文明ということが言われる。メソポタミア、エジプト、インダス、中国の古代文明である。しかしこれは適切ではない。アメリカ大陸を無視している。メソアメリカ、中央アンデスを加えて 6 大文明というべきである」と述べられている（中公新書、1998 年、pp. 27-28）。

また筆者が専門地域とするブラジルには、アマゾンの密林に現在でもヨーロッパ文明との接触を経していない先住民「イゾラドス」（隔離された人々）の存在が確認されている。つまり、過去の遺跡群とは違って、太古からの生活様式に現在も尚生きる人々の存在である。

さて、確固たる文明を築いていたメソアメリカやアンデスの先住民の存在は、ヨーロッパ人によって「発見」され、さらに古代から築き上げられてきた彼らの文化は変容もしくは形骸化され、そこに多くの遺跡群が取り残されてきた。その後、奴隷として自らの意志に関係なく移動を強いられたアフリカ人やアジアの民族の存在に関しても、ヨーロッパ史から観れば共通する流れがある。

一方で、ヨーロッパ諸国によって植民地化されたアメリカス世界や東南アジア諸国とは違って、日本は徳川の時代に入り鎖国制度を布き、一部の国々を除いてヨーロッパ諸国との貿易は遮断され、植民地化されることは一度もなかった。しかし、鎖国までの間、ヨーロッパからは確実に西暦の暦が刻まれ、イエズス会の人々によって数々の書簡がバチカンに送られていった。

大航海の時代を経て、重商主義の時代に入り、ヨーロッパ各国は奴隷制度を布き、アメリカス社会にはアフリカから大量の奴隷が新大陸開発の担い手としての移動を余儀なくされた史実は良く知られている。奴隷貿易については日本も例外ではなく、天正 15 年（1587）6 月 19 日、豊臣秀吉が宣教師追放令を發布し、その一条の中に、ポルトガル商人による日本人奴隷の売買を厳しく禁じた規定がある。日本人を奴隷として輸出する動きは、ポルトガル人がはじめて種子島に漂着した 1540 年代の終わり頃から始まったと考えられている。16 世紀の後半には、南米アルゼンチンにまで日本人は送られるようになり、1582 年ローマに派遣された少年使節団の一行も、世界各地で多数の日本人が奴隷の身分に置かれている事実を目撃している（池本幸三著『近代世界と奴隷制—大西洋システムの中で—』人文書院、2003 年）。この奴隷制度については、東南アジアでも同様の史実がある。

19世紀に入り、アメリカ合衆国によって鎖国制度が解かれ、大政奉還を余儀なくされ、明治維新を迎えた日本とは違って、産業革命前後からは奴隷解放と共に大量に自由意思によって国際的人口移動を行ったヨーロッパからの移民群によって形成され、次々と独立を果たしていったアメリカス世界独自の歴史を考えるならば、アメリカス世界はヨーロッパやアジアとは異質の歴史を展開してきたと言える。しかし、一方で大航海時代から西暦の歴史観によって暦が刻まれ始めた史実については、日本や東南アジアも決して異質であるとは断定できない。

実際にアメリカス世界と日本、また東南アジアの観光を古代文明を接点として眺めるとき、その関係性を捉えることは容易ではない。しかし、多少強引ではあるが、西暦が「侵略」する以前における各地域独自の文明を通してイメージされる歴史観を共有できれば、何かが見えてくるような気がしてならない。

基調講演をしていただく關雄二氏は、長年にわたりアンデス・メソアメリカ地域における遺跡調査に従事するばかりではなく、文化遺産と地域社会との相互関係に踏み込んだ提言・実践をおこない、地域住民の主体性を尊重する持続可能な観光開発に取り組んでこられた。また、本年9月6日にはペルー北部高地のパコパンパ遺跡において、極めて珍しいとされる紀元前800年から500年頃のジャガーと人間の合体石彫を発掘したことが、日本の大手新聞に掲載されている。

今回のテーマから、アメリカス世界以外の古代文明と各国、地方自治体、地域社会の開発戦略を浮き彫りにすることで、アメリカスに於ける独自の観光観を認識し、また一方で、古代文明を通して観光開発の戦略を展開する各地域社会の葛藤を共通項とすることで、特に奈良県下において観光開発を模索する方々に何らかのヒントを提供できれば幸いである。

さらに、天理大学では2009年度改革の中に、「各種プログラム」が設置され、その中に「国際観光プログラム」が開設されている。その事実をふまえ、この機会にアメリカス学会から「観光」をクローズアップしたい。また、学会として「観光」をテーマに取り上げ、シンポジウムの結果を踏まえ、2014年秋の大会までに『創られた観光イメージ—アメリカス社会における開発戦略—』（仮）をテーマとした書籍の出版を企画し、「国際観光プログラム」によって設置された各科目で使用できるテキストにできればとも考える。

アメリカス学会では、「創られた観光イメージ」をテーマとすることで、その定義を浮き彫りにし、あくまでも産業としての観光の視点で「観光」を語り、情報を構築したい。

(天理大学アメリカス学会会長)

文学の中のアメリカ生活誌 (60)

新井 正一郎

Florida (フロリダ州) この語の由来は2つある。1つは1513年の復活祭の日に、キューバの総督であったスペイン人ポンセ・デ・レオンがキューバの北を航行中、発見した大きな島が花であふれていたことから、florida (スペイン語で「花いっぱい」の意味) と命名したこと、もう1つはスペインでは復活祭は花祭り (pasqua florida) と呼ばれていたことによる。レオンはこの地域に伝説の「富と永遠の若さの泉」があると信じ、1521年に再度訪れた。この時この地が島でなく、陸地であることを知り、植民地を建設しようとしたが、先住民との戦いで亡くなった。1566年、同じスペイン人のアビレスがフロリダ北部のサンアウガスティン (現在のセントオーガスティン) に植民を試みた。フロリダ半島には一時フランス人がガリオン船 (大型帆船) でスペイン本国に送られるフロリダ産の船荷を襲う目的で、キャロラインに砦を築いたことがあったが、すぐにスペインの討伐隊によって追い出され、以後長らくスペインの支配圏内にあった。

ところが1756～63年のフレンチ・アンド・インディアン戦争 (イギリス・アメリカのイギリス領植民地軍とフランス・インディアン連合軍が新大陸の覇権を求めての武力抗争で、1761年からはスペインもこの戦争に対するフランスの共同交戦国として参戦した) でイギリス・植民地軍連合が勝利したことで、スペインは1565年から自国領であったフロリダをイギリスに譲渡した。その後 (1783年)、スペインがイギリス領バハマ諸島をぶんどると、1763年から20年間イギリスの支配下にあったフロリダは、バハマ諸島と交換に再度スペインの主権下に置かれるという複雑な経緯をたどる。加えていうと、1784年からのフロリダ (当時は現在のフロリダ州とルイジアナ州の間の土地である西フロリダと東フロリダに分かれていた) の第2スペイン時代は、1821年まで続くが、東フロリダの要塞化された3つの町 (ペンサコーラ、セントマークス、セントオーガスティン) の外側の未開地では、インディアン諸部族が事実上の支配者であった。わけてもセミノール族は、アパラチコーラ川沿いのネグロ要塞を本拠地としていたマルーンと呼ばれる脱走奴隷と結託して国境を越えアメリカの新しい開拓地を襲ったので、南部の辺境地で暮らすイギリスの入植者は恐れを抱いていた。そうした状況の中、ジョージア州の川沿いの地帯で開拓民がセミノール族に襲われ、頭の皮を剥がれる事件が起きた。1818年、アンドルー・ジャクソン指揮下の民兵部隊は、連邦政府の命令を受けスペイン領の東フロリダに侵入、セントマークスに匿われていた2人のインディアン酋長と彼等に連邦軍の情報を伝えていたイギリス人の民間人と元兵士を逮捕・処刑、さらにセント条約によってスペイン領に戻されていたペンサコーラ (アメリカにおけるスペイン領植民地の首都) を占領、スペインの総督を追放した。スペイン領フロリダでのジャクソンの勝手なやり方は、当時のスペインのこの地に対する影響力の弱さを物語るものだが、この頃のスペインはメキシコと南アメリカのスペイン植民地で生じた反乱の鎮圧にかかりきりで、フロリダに軍隊を送りこむ余裕はなかった。これがスペインにフロリダのアメリカへの売却を決断させる原因となった。1819年、モンロー政権の國務長官アダムズとワシントン駐在スペイン大使オニスが決めた、いわゆるアダムズ＝オニス条約で、アメリカは500万ドルで東・西フロリダの名で知られていたスペイン王所有の領土を手に入れた。1845年、フロリダは27番目の州として合衆国に加わった。

キー・ウェスト（地名はスペイン人がこの地で先住民の人骨を見つけたことから命名した「人骨の島」というスペイン語 Cayo Hueso にちなむ）は、フロリダ州の港湾都市として有名であるが、文学的にもかかわりの多い地域である。19世紀の早い時期にこの地を訪れた文筆家の一人にハイチ生まれのフランス人ジョン・J・オーデュボン（1785～1851）がいる。鳥を専門に描いた画家としても知られている彼は、1820年からニューオーリンズをふりだしに西部辺境地を歩き、鳥や野生動物の生態をさまざまに描く傍ら、自然著作家として訪れた地域の風景や鳥と人間との関わりに関する自らの発見を報告していた。彼を有名にしたのは、1827年刊行の『アメリカの鳥類』であった。1832年、鳥の観察のためキー・ウェストに来た彼は、同年「フロリダ探訪」と題するエッセイに自筆の絵を添え、東フロリダの自然に対する感受を書いた。

ハリエット・ビーチャー・ストー（1811～1896）は、ワシントンで会ったリンカン大統領をして「あなたがこの大きな戦争（南北戦争）を引き起こした書物（『アンクル・トムの小屋』）を書いた小さなご婦人なのですね」と云わせた作家である。南部の奴隷たちの不当な生活を描いたこの小説は、発売と同時にベストセラーとなった。彼女は1867年に牧師であった夫と共同名義で手に入れた州北東部の港町ジャクソンヴィルの南、マンダリンにあったオレンジ農園で、家族と共に長年冬を過ごすのを常としていた。彼女は農園を自由な黒人労働者の効果的な雇用の模範にしようと思ったが、この願いは、彼女の文学的名声が高まるにつれ、農園を一目見ようと押し寄せてくる観光客の数を制限するため、25セントの入場料を導入せざるを得なくなり叶えられなかった。

「失われた時代」の作家アーネスト・ヘミングウェイが、友人ロス・パソスの紹介でキー・ウェストを訪れたのは1930年。彼は真っ青な海で好きな魚釣りができるこの地によほど魅了されたのみえ、1939年まで2度目の妻とこの地で暮らした。1937年に出版された『持つと持たぬと』はキー・ウェストが舞台の作品だ。彼のキー・ウェスト在住当時の注目すべきものは、頻りにキューバへめかじき釣りに出かけていたことだ。この釣りの旅で貧しいけれど、自然のなかで大らかに遅く暮らしている素朴なキューバ人漁師に本当の生の喜びを見出すようになったことは、伝統的な文化（清教主義とヴィクトリア朝のお上品ぶり）に感染していたアメリカを拒否し、強い嫌悪感をいだく志向を自らのうちに育てていくことになる。キューバへの永住を決意した彼は1939年、フロリダを離れた。後に出した『バイ・ライン』には「キューバに住む理由を聞かれたら、キューバが好きだからだ」とある。そんなわけで1959年1月、バティスタ独裁政権を倒し、実権を握ったカストロ革命政府が、キューバ人を搾取しているという理由からキューバにある多くのアメリカ企業を差し押さえたことが引き金となり、アメリカのキューバへの経済的、軍事的制裁が始まると、彼はカストロを支持しただけでなく、自分を心情的にキューバ住民と称したことは、われわれの関心をそそらずにはおかない。こうみてくれば、愛したキューバの小村コマーヒルを舞台にした1952年の『老人と海』では、アメリカ人が一人も現われないのは、故なきことでないことがわかる。ついでに記すと、彼は1960年のめかじき釣りの大会で1度だけカストロと会っている。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

【アメリカス学会定例研究会・発表要旨】

米国統治大変革としてのニューディール

山倉明弘

1930年代のニューディールは、著名な研究者たちが「憲法革命」⁽¹⁾、「裁判所革命」⁽²⁾、「ニューディール革命」⁽³⁾、「ローズベルト革命」⁽⁴⁾の語で形容するほどの決定的な変革をアメリカ社会にもたらし、それは戦後社会に大きな永続的影響を与えた。それは、ニューディールがアメリカ社会にもたらした下記の決定的、永続的変化を観察するとすぐ実感するであろう。

1. 最低賃金法

1923年当時、最低賃金法は雇用主に強制して社会へ補助金を出させることと考えられていたが、15年後には最低賃金法の不在こそが、社会に強制して雇用主へ補助金を出させることと考えられるようになった。20世紀に入ってアメリカでは、自由放任経済思想(レッセ・フェール)重視の流れが変わり、州政府や連邦政府が経済規制を強めるようになって、合衆国最高裁は、政府による経済規制を退け続けてきた。ところが1937年の判決⁽⁵⁾で最高裁は一転して最低賃金法を合憲と認めた。この後、最高裁は政府による経済規制を受け入れるようになり、その傾向は戦後長く続いた。最低賃金という概念は現在先進国では常識である。

2. 最大労働時間

憲法学者のキャス・サンズティンによれば、1910年当時、憲法解釈(最高裁の判例)は最大労働時間と最低賃金を違憲として禁止していた。しかるに、1940年までにはそれらは憲法解釈で容認されるようになった⁽⁶⁾。最大労働時間も現代社会にしっかりと根付いており、労働の柔軟化で一部の職種で最大労働時間が軽視され始めたのはごく最近のことである。

3. 「買主が注意せよ(キャピアット・エンプター)」原則から、情報公開による投資家保護へ

ローズベルト政権は1933年証券法と1934年証券取引法により、株式取引に対する政府の監督を強め、一般投資家に十分な情報が提供されることを確保した。このことはcaveat emptor(買主が注意せよ)という旧来の原理を改め、ある取引分野の素人の保護のために法的制限を設けた顕著な例として注目される。

4. 市民の失業・老後への備えに連邦政府が関与

ローズベルト政権はまた、1935年社会保障法により、失業や老後に備えるのは個人の責任だとい

う伝統的な考え方に対して、これを公的な関心事としてとりあげ、しかもそれを地方自治体や州のレベルにおいてでなく連邦政府のレベルにおいてとりあげる意志を明らかにした。

5. 労働者の団結権・団体交渉権を立法措置で保証

1905年の最高裁判決は、1週間および1日の最大労働時間を定めたニューヨーク州パン工場法が、雇用者、労働者双方が自由に(労働)契約権利を結ぶ権利に不当に干渉しているとしてニューヨーク州最高裁の判決を棄却した。つまり、労働者は、格段に力の違う雇用主との交渉の場に無力のまま放り出されたのだった。これに対し、ローズベルト政権は1935年全国労働関係法(通称、ワグナー法)により、労働者の団結権・団体交渉権を立法措置で保証した。

かくの如く、ニューディール政策はそれまでのアメリカ社会のあり方を大きく転換し、その結果は戦後社会に長く影響し続けた。アメリカ社会の三大変革期は、(1)独立革命と憲法による統治の確立を見た建国期、(2)南北戦争・戦争修正の結果としての再建期、そして(3)連邦政府による資本主義規制と福祉国家建設をもたらしたニューディール期である。(1)の達成手段は憲法制定、(2)の手段は憲法修正、(3)の手段は主として最高裁による判例変更であった。また、(2)と(3)を通じて、かなりの程度州政府の権限(州権)を抑え、連邦政府が強大になった。それでも州権は消滅せず、やがて州権論は強烈に復活する。その典型は、国民皆健康保険をめざした2008年医療保険改革法(通称「オバマ・ケア」)の実施を阻止する目的で、25の州が連邦政府を提訴し2012年に最高裁で争われた事件である。

(1) Edward Samuel Corwin, *Constitutional Revolution, Ltd.* (Claremont, CA: Pomona College, 1941); William E. Leuchtenburg, *The Supreme Court Reborn: The Constitutional Revolution in the Age of Roosevelt* (New York: Oxford University Press, 1995); Barry Cushman, *Rethinking the New Deal Court: The Structure of a Constitutional Revolution* (New York: Oxford University Press, 1998); 松井茂記『アメリカ憲法入門』、第7版、有斐閣、2012年、18頁。

(2) 今津晃「いわゆる『裁判所革命』とその前後」、今津晃他編『市民的自由の探求—両大戦間のアメリカ—』、第8章、世界思想社、1985年。

(3) Bruce Ackerman, *We the People: Transformation* (Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1998)、265。

(4) Cass R. Sunstein, *The Second Bill of Rights: FDR's Unfinished Revolution and Why We Need It More Than Ever* (New York: Basic Books, 2004)。

(5) *West Coast Hotel Co. v. Parrish*, 300 U.S. 379 (1937)。

(6) Sunstein, 123。

ベネズエラ・チャベス政権 14 年の光と陰 —大統領国葬にみるチャベス神聖化の動き—

野口 茂

2013 年 3 月 5 日、南米ベネズエラのウゴ・チャベス大統領が死去した。彼は 1998 年に初当選して以降、圧倒的な国民からの支持と潤沢な石油収入を背景に、14 年にも及ぶ長期政権を実現させた。反米・反帝国主義、ポピュリスト、独裁者とさまざまに形容されたチャベス政権の特質を検証する試みとして、本報告では 3 月 8 日に執り行われた同氏の国葬に着目することにした。

国葬に押し寄せた数十万の支持者たち

元軍人で「アウトサイダー」であったチャベス登場（1998 年）の背景には、石油ダラーの恩恵に浴せず社会的に排除されてきた貧困層の存在があった。周知のようにベネズエラは、石油開発によって未曾有の経済成長を享受したものの、1980 年代に入り経済は失速し、ネオリベリズム経済改革の断行を余儀なくされた。貧困率は 55%（1998 年）にまで達した。そうした国民に鬱積した怒りを代弁すべく、汚職や貧困の撲滅、反新自由主義を訴えて現れたのがチャベスだったのである。誰もが待望した「救世主」の出現であった。彼は豊富な石油収入を「ミッション」と呼ばれる社会福祉事業に予算化し、貧困層の生活改善に取り組んだことにより、貧困率を 2010 年には半減させることに成功した。

こうした施策の受益者であった貧困層にとって、チャベスの死はまさに「救済者の喪失」を意味した。死去の翌日、マドゥロ副大統領（当時）が歩いて霊柩車を先導し、約 7 時間かけて国葬会場までを行進した。市内は数十万におよぶ支持者で埋め尽くされた。だが、遺体の永久保存を目論んでいたにもかかわらず、あえて炎天下、長時間かけて行われたこのパフォーマンスは、国民の追悼の念をチャベス後継者に対する忠誠へと転化させる役割をはたした。チャベスの神格化によって、指導者なき国難を乗り切ろうとする現政権の意図も同時に垣間見ることができたのである。

反米諸国のリーダー像の演出

国葬に参列した 55 カ国からの弔問団のなかに、ボリビアやキューバ、イランといった反米左派諸国の盟友たちも顔を連ねた。彼らの結束力の根底には、反米的な政治思想への共鳴があったほかに、チャベスの石油外交から享受した経済的恩恵もあったことを忘れてはならない。彼は原油価格の高騰による巨

額の石油収入を原資に、米州ボリバル同盟をはじめとする経済協力プログラムを次々に締結。ラテンアメリカ域内はもとより中国やイランなど反米諸国との交流も深め主導的な立場を築いたのである。

国葬の場では、エクアドル、ニカラグア、ボリビアの各大統領、そしてカストロ議長らが一同に参列し冥福を祈った。また、米国との対決姿勢を強めていたイランのアフマディネジャド大統領（当時）が棺に口づけすると、列席者から総立ちの拍手がわき起こった。反米諸国の結束を訴えた盟主としてのチャベス像を際立てようとする、政治的思惑が色濃く反映された演出であったといえよう。

国葬に同席した 3 名の宗教者

さらに国葬の場で目を引いたのが、教派の異なる 3 名の宗教者が同席したことである。カトリック司教とプロテスタント牧師が説教をおこない、その後、米国バプティスト派牧師のジャクソン師が弔辞を読みあげたのだ。

チャベスの強権的な政治手法によりカトリック教会が数少ない反対派勢力として顕在化する一方で、政権はプロテスタントとの協働をはかりながらカトリック教会との対決姿勢を強めていった。また、ブッシュ前大統領を「悪魔」にたとえるなど反米姿勢を貫いたチャベスだが、彼の貧困対策を高く評価したジャクソン師との交流を通して、米国にも親チャベス派が多くいることを積極的にアピールした。国葬に 3 人の宗教者が招かれた背景には、「信教の自由」の原則を盾にカトリック教会を諸宗教と同等視する現政権の姿勢、つまり教会の伝統的な既得権益を奪い、現政権の管理下におこうとする強い政治的メッセージが込められていたのである。

チャベス像の神聖化とその限界

生前、南米の解放者シモン・ボリバルや祖国独立の英雄を、自身の政治思想を正統化するため巧みに利用したチャベスだったが、いま、後継者たちによって彼自身が意図的に神聖化されようとしている。政権の存続と国民統合を目的に政治利用されており、同氏の国葬はまさにそれを象徴するものであった。チャベス亡き後、現政権の求心力は急速に弱まる一方で、治安の悪化や景気低迷にあえぐ国民の不満が限界に達しつつある。マドゥロ現大統領が国内の矛盾を糊塗するかのよう「チャベス像」を幾度となく掲げ、「代理者・後継者」としての正統性を誇示したとしても、社会経済の混乱を収束させるための道のりは厳しいと言わざるを得ない。

（天理大学国際学部准教授）

お知らせ

天理大学アメリカス学会は、来る 11 月 23 日 (土) 13:00 から天理大学研究棟 3 階第 1 会議室において、「第 18 回年次大会」を開催します。今回は、「観光開発と古代文明」という統一テーマを掲げパネル・ディスカッション形式で議論を展開します。大会当日は、学会誌『アメリカス研究』第 18 号を会員のみならず配布させていただきます。お楽しみにご来場ください。なお、大会プログラムは次のとおりです。

《総会》 12:00～12:30

《年次大会》 13:00～17:00

基調講演 13:20～14:30

關 雄二 (国立民族学博物館教授)

「南米ペルーにおける文化遺産観光とその問題点」

パネル・ディスカッション 15:00～17:00

・藤巻 正己 (立命館大学教授)

「東南アジアにおける遺産観光とポリティックス」

・井上 昭洋 (天理大学准教授)

「観光と古代遺跡：ハワイの事例から考える」

・桑原 久男 (天理大学教授)

「考古学と邪馬台国」

・小林 貴徳 (同志社大学嘱託講師)

「観光大国メキシコのいまー文化遺産の観光資源化をめぐる」

基調講演をしていただく關雄二先生は、長年にわたりアンデス・メソアメリカ地域における遺跡調査に従事するばかりではなく、文化遺産と地域社会との相互関係に踏み込んだ提言・実践をおこない、地域住民の主体性を尊重する持続可能な観光開発に取り組んでおられます。

元天理大学教授の藤巻先生にもご協力をたまり東南アジアの事例を、桑原先生には邪馬台

国についての刺激的なお話を、井上先生にはハワイの事例を、小林先生にはメキシコのお話をお聞かせいただく予定です。また、このたびの年次総会には矢持会長の強い希望により、石神神宮を含む「山の辺の道」世界遺産登録をめざすまほら座のメンバーをはじめ広く一般のご参加を呼び掛けております。当学会の活動が地域活性化に貢献できれば幸いです。

編集後記

近代は、慣習・伝統・信仰に裏打ちされた聖性が再帰的モニタリングにさらされ、魔術性を喪失してきた時代です。科学という大きな物語が終焉した今＝ポストモダン、われわれは前近代とは異なる流儀で聖性を求めています。それは、市場の外部にあったモノが消費対象として悪魔のひき白に取り込まれる過程でもありません。観光という脈絡はわれわれの置かれている現在を考察する絶好の場であります。知の伝達のみならず、その伝え方まで問題にされる昨今の大学は、学歴神話が崩壊した現代社会の鏡でもあるようです。

◇当学会の年会費は一般会員は、5,000 円です (入会金はありません)。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年 1 口 3 万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 69 : 2013 年 11 月 1 日発行)

発行者：矢持善和

〒 632-8510 天理市杣之内町 1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>